

紀元前 1 千年紀上ヌビアにおけるクシュ王国の形成 ーヌビア全域における墓構造と遺跡分布の研究からー

坂本 翼

Emergence of the Kushite Kingdom in the First Millennium BC, Upper Nubia :
Perspectives on Tomb Structures and Site Distributions

Tsubasa SAKAMOTO

紀元前 8 世紀中葉の上ヌビアに出現し、第 25 王朝として瞬く間に古代エジプトを支配したクシュ王国は、今日まで勢力基盤の不明な存在とされてきた。その最大の理由は、第 3 中間期の考古資料が、ヌビア全域で全く確認されていなかったことにある。本稿は、近年になり検出され始めた第 3 中間期の考古資料を従来の研究に加味することで、第 25 王朝創立に先立つ、クシュ王国形成期におけるヌビアの変動を考察する。ヌビア全域に存在する墓の構造、第 3 中間期前後における遺跡分布の変遷、という 2 点に着目し分析を行った結果、第 3 中間期を境として、ヒラト・アル＝アラブと同種のシャフト墓と下降階段墓は、相互に排他的な分布域を占めることを明らかにした。この分析結果は、クシュ王国の形成前後で人間集団が一変した可能性を示唆している。

キーワード：クシュ王国、ヌビア、古代エジプト第 25 王朝、ヒラト・アル＝アラブ、国家形成

By the eighth century BC, Upper Nubia had an established political entity called the Kushite Kingdom. Although the origins of the Kushite Kingdom were thought to be represented by the cemetery of el Kurru, no archaeological material had ever been found throughout Nubia between the end of the New Kingdom and the beginning of the Kushite rule in Egypt as the 25th Egyptian Dynasty. In Upper Nubia, however, recent surveys that revealed the previously unknown pre-Kushite/Third Intermediate Period sites such as Hillat el Arab, have rapidly broken the deadlock. From perspectives above, this paper investigates the formative period of the Kushite Kingdom by analyzing its tomb structures and site distributions. As a result, it is found that shaft tombs and stairway tombs of the same kind as Hillat el Arab have mutually exclusive distributions before and after the Third Intermediate Period. This result suggests that the members of the ancestral Kushite Kingdom appear to have constituted entirely different cultural groups from that of previous ones.

Key-words: Kingdom of Kush/Kushite Kingdom, Nubia, 25th Egyptian Dynasty, Hillat el Arab, state formation

はじめに

紀元前 8 世紀中葉の上ヌビアに出現し、第 25 王朝（747～656BC¹⁾）として瞬く間に古代エジプトを支配したクシュ王国（Kingdom of Kush/Kushite Kingdom）は、その突出した勢力にもかかわらず、今日まで勢力基盤の不明な存在とされてきた。その最大の理由は、クシュ王国確立の証左とされる第 25 王朝創立に先立つ約 300 年間、すなわち第 3 中間期²⁾（1069～747BC）における考古資料が、ヌビア全域で全く確認されていなかったことにある。考古資料が完全に欠落していたために、第 3 中間期の研究自体が不可能だったのである。ところが、近年になり第 3 中間期の遺跡が確認されたことで、研究上の閉塞感は急速に解消され始めている。本稿の目的は、近年蓄積が著しい第 3 中

間期の考古資料を従来の研究に加味することで、ヌビア全域における物質文化の広がりを捉え、第 25 王朝創立に先立つ、クシュ王国形成期におけるヌビアの変動を考察することにある。

上記の目的意識から、本稿は次の構成をとる。まず、クシュ王国形成期を研究する上で最大の障害とされてきた、第 3 中間期ヌビアにおける考古資料の欠落状況を整理する。次に、従来の研究における問題点を指摘し、主に第 3 中間期の考古資料を検討することで問題解決を試みる。とりわけ、ヌビア全域に存在する墓の構造、第 3 中間期前後における遺跡分布の変遷、という 2 点に着目する。そして最後に、分析結果に基づきクシュ王国形成期の素描を試みる。

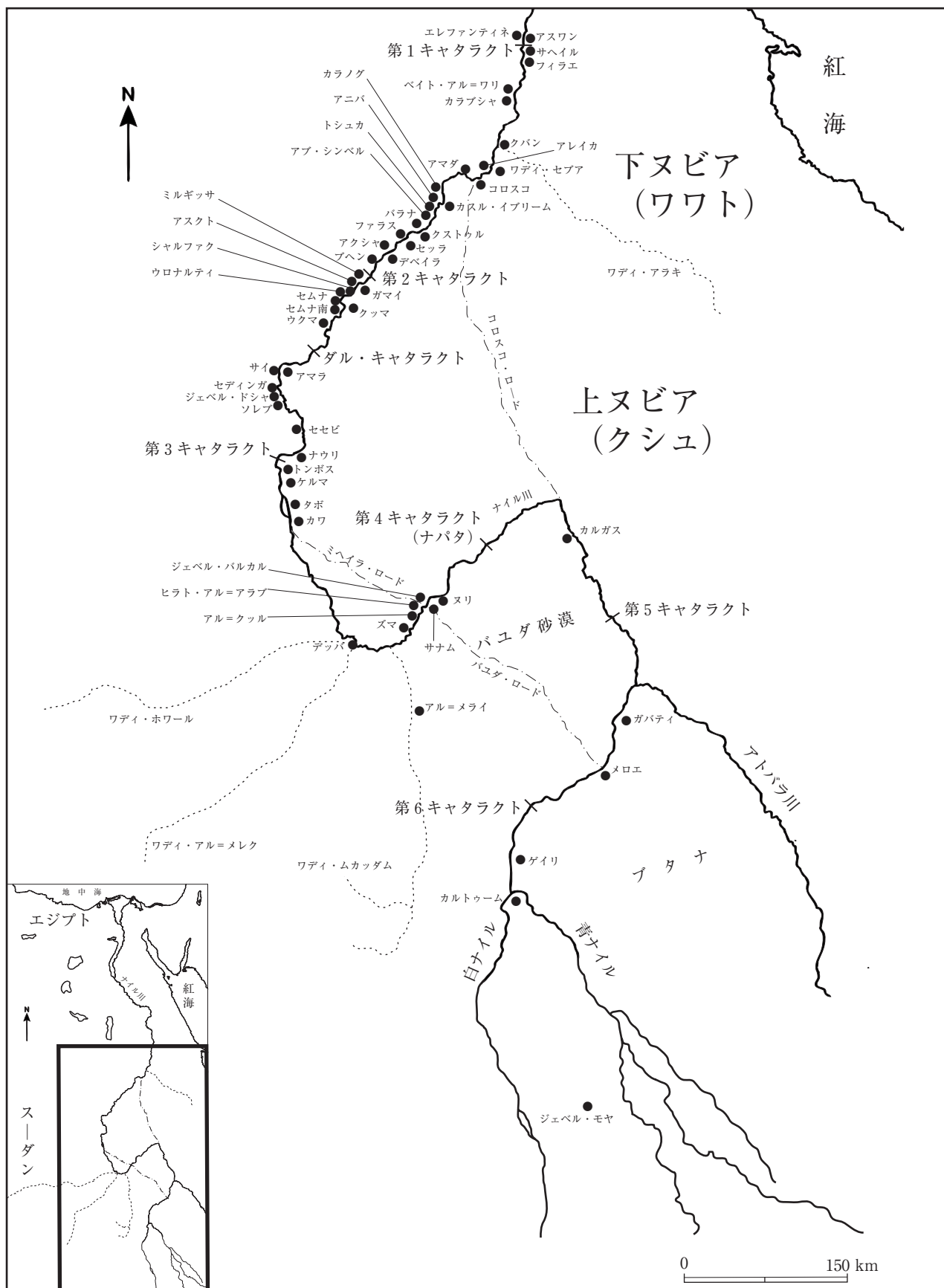


図1 本稿で扱う主な遺跡

論を進めるに当たり、本稿で使用する地理名称を定義しておく。第一に、ヌビア (Nubia) とは「第1～第6 キャタクト間のナイル川流域一帯」を指し、古代エジプト人が「ヌビア人の国 (Ta-Nehesy)」と呼んだ地域に相当する (図1)。ヌビア人とは、当時この地域に居住していた人間集団を意味している³⁾。第二に、ヌビアをさらに2つに細分し、それぞれ下ヌビア (第1～第2 キャタクト)、上ヌビア (第2～第6 キャタクト) と呼称する。両地域の区分は既にエジプト人が行っており、下ヌビアはワウト (Wawat)、上ヌビアはクシュ (Kush) という古代名で呼ばれていたことが、文献資料から判明している (Morkot 2000: 2)。したがって、ヌビアの歴史を論じる上で、上下ヌビアという区分は考慮しておかなければならない。なお、特に断らない限り、以下「ヌビア」と単独で用いる際には上下ヌビアの両方を指す。

研究史

上ヌビアにクシュ王国が形成されるまで約2000年間にわたり、ヌビアはエジプトの従属下にあった。とりわけ新王国時代 (1550～1069BC) には、ヌビアはエジプトによって完全に支配されていたことが知られている (Kemp 1978; Adams 1984; Smith 1997)。この両者の主従関係は、クシュ王国のエジプト支配をもって初めて逆転することになるのである。いわば下克上とでも形容すべきこの出来事は、早くからエジプト学者の関心を惹きつけ、20世紀初頭に研究が開始されることになる。以下、下ヌビアと上ヌビアに分けて研究史を概括する。

下ヌビアでは、1) 気候乾燥化によるナイル川の水位低下 (Firth 1915: 21-23; Adams 1964)、2) ラムセス11世治下での下ヌビア内乱⁴⁾ (O'Connor 1993; Török 1995a)、の2つを主な原因として、第3中間期当時は完全に放棄されていたとする説が提示されている。下ヌビアは既にアスワン・ハイダムの中に水没しているため、現在では両仮説の検証自体はほぼ不可能であるが、いずれにせよ研究者全体が、第3中間期の下ヌビアは完全に放棄されていたという認識を共有していたため、そこからクシュ王国形成期の具体的な議論へ発展することはなかった (Trigger 1965: 112-114, 1976: 137; Adams 1977: 241-243)。

一方の上ヌビアでは、20世紀初頭に始まる編年問題を1つの軸として、クシュ王国形成期が議論されてゆくことになる。その端緒となったのが、第4キャタクトに位置するクシュ王国の王墓地アル=クッル (El Kurru) に、王墓と並び造営された数基の墳丘墓であった。これら墳丘墓が王墓と比較して簡素な構造を有していたことから、アル=クッルの発掘者であるレイズナー (Reisner, G. A.) は、墳丘墓の年代を王墓よりも古いもの、すなわち墳丘墓

の埋葬者をクシュ王国の祖先集団と推定し、これら墳丘墓の検討からクシュ王国の起源を探ろうと試みたのである (Reisner 1919)。このときレイズナーが用いた研究法が、墳丘型式に基づく編年の構築であり、そこからクシュ王国の上限年代を特定するというものであった。

その後の研究は、レイズナーによって構築された型式編年を精緻化する方向へ進んでゆく (Dunham 1950)。そして1980年代以降、長期編年 (Török 1995b)、短期編年 (Kendall 1999) という2つの対照的な型式編年が構築され、それぞれが全く異なる上ヌビア像を主張することになる。両者の論点は多岐にわたるが、第3中間期の上ヌビアに関する解釈は次のようにまとめることができる。長期編年は、第3中間期の時点で既に、上ヌビアにクシュ王国の前身勢力が存在していたと主張し、一方の短期編年は、第3中間期の上ヌビアが完全に放棄されていたと主張する。アル=クッルの考古資料に基づきクシュ王国形成期に迫ろうとするこの立場は、20世紀末に一時的な高まりを見せたが (Wenig 1999)、それはまた、アル=クッルに終始する研究の限界をも示していた。以上に提示された2つの編年は、それぞれの主張を裏付ける資料を提示することができないまま、その後頓挫してゆくことになるのである (Török 2008)。

第3中間期における考古資料の欠落

以上に概括したように、クシュ王国形成期の研究史はアル=クッルの研究史と言っても過言ではない。これほどまでに狭く、限定された研究が行われていた背景には、考古資料の欠落が存在する。新王国時代終焉から第25王朝創立までの約300年間、すなわち第3中間期におけるヌビアには、考古資料が完全に欠落していたのである。

第3中間期における考古資料の欠落は、決して、ヌビアで行われた発掘調査の少なさに起因するものではない。このことは、1960年代に行われたヌビア遺跡救済キャンペーン (Vercoutter and Adams 1959) から明らかである。十分な調査が行われていなかった上ヌビアと異なり、この時、60を超える調査隊が下ヌビアの調査を行ったにもかかわらず、1例たりとも第3中間期の考古資料が検出されなかったという事実が存在する。

考古資料欠落の顕著な例が、第4キャタクトに位置するジェベル・バルカル (Jebel Barkal) である。ジェベル・バルカルは、「アメンの住処」としてアメン神の信仰中心地となった遺跡であり (Reisner and Reisner 1933: 35)、テーベのカルナック神殿に匹敵する大規模なアメン神殿が多数造営されている。現在、新王国時代最古の証拠として確認されているのは、トトメス3世が建立したステラであり (Reisner and Reisner 1933)、新王国時代を通じ

表1 第3中間期ヌビアにおける考古資料の欠落状況

遺跡名	新王国時代				第3中間期	ナバタ朝 (第25王朝)	文献
	第18王朝	第19王朝	第20王朝				
Bigeh	トトメス3世、アメンヘテプ2世						Weigall 1907
Beit el Wali		ラムセス2世					Weigall 1907
Kalabsha	アメンヘテプ2世				タハルカ		Weigall 1907; Roeder 1912
Dakka	トトメス2世、3世	セティ1世					Weigall 1907
Gerf Hussein	トトメス3世、アメンヘテプ3世、ホルエムヘブ	ラムセス2世					Weigall 1907
Kubani	アメンヘテプ3世、アクエンアテン	セティ1世、ラムセス2世					Weigall 1907; Firth 1927
Wadi es Sebua		ラムセス1世、セティ1世、ラムセス2世					Weigall 1907; Gauthier 1912; Firth 1927
Amada		メルエンブタハ、シブタハ、タウセルト					Weigall 1907
Derr	トトメス3世(?)、アメンヘテプ3世、アクエンアテン(?)、ホルエムヘブ(?)	ラムセス2世	ラムセス6世(?)				Blackman 1913
Aniba	アメンヘテプ1世、トトメス2世、アメンヘテプ2世	セティ1世、ラムセス2世	ラムセス6世、11世				Weigall 1907; Steindorff 1937
Qasr Ibrim	アメンヘテプ3世、ホルエムヘブ	トトメス3世、アメンヘテプ2世	ラムセス3世	(+)	タハルカ		Horton 1991; Rose 2008
Toshka		セティ1世、ラムセス2世、セティ2世					Simpson 1963
Abu Simbel	アメンヘテプ1世、ハトシェプスト、トトメス3世、アメンヘテプ3世	ラムセス2世			(+)		Weigall 1907
Qustul							Williams 1990, 1992
Faras	カーメス(?)、アメンヘテプ1世(?)、ハトシェプスト、トトメス3世、アクエンアテン(?) トウトアンクアメン、ホルエムヘブ	ラムセス2世			タハルカ		Griffith 1921
Serra		(+)					Williams 1993
Debeira	イアフメス、アメンヘテプ1世(?)、トトメス1世(?)、ハトシェプスト、トトメス3世、アメンヘテプ3世(?)	(+)		(+)			Säve-Söderbergh et al. 1991
Aksha		セティ1世、ラムセス2世					Fuscaldo 1994
Buhen	カーメス(?)、イアフメス、トトメス1世、2世、ハトシェプスト、トトメス3世、アメンヘテプ2世、トトメス4世、アメンヘテプ3世、アクエンアテン、トウトアンクアメン、ホルエムヘブ	ラムセス1世、セティ1世、ラムセス2世、メルエンブタハ、セティ2世、シブタハ	ラムセス3世、4世、5世、11世		タハルカ		Randall-Maclver et al. 1911 Emery et al. 1979
Mirgissa		(+)			ジャバカ		Vertoutter 1975
Askut	トトメス3世、アメンヘテプ2世、トトメス4世						Smith 1995
Gamai		(+)					Bate et al. 1927
Uronarti	アメンヘテプ1世、トトメス1世(?)、トトメス3世(?)、アメンヘテプ2世(?)						Dunham 1967
Senna	トトメス1世、2世、ハトシェプスト、トトメス3世		ラムセス3世		タハルカ		Dunham et al. 1960; Caminos 1974
Kumma	ハトシェプスト、トトメス3世、アメンヘテプ2世、トトメス4世						Dunham et al. 1960; Caminos 1998
Amara West	ハトシェプスト(?)、トトメス3世(?)、アメンヘテプ3世(?)	セティ1世、ラムセス2世、メルエンブタハ、アメンメス	ラムセス3世、6世、9世				Spencer 1997
Sai	イアフメス、アメンヘテプ1世、ハトシェプスト、トトメス3世、アメンヘテプ3世	セティ1世、ラムセス2世	ラムセス11世		タハルカ		Vertoutter 1985
Sedeinga	アメンヘテプ3世				タハルカ		Leclant 1984
Gebel Dosh	トトメス3世	セティ1世					Davies 2004
Soleb	アメンヘテプ3世、アクエンアテン、トウトアンクアメン	ラムセス2世	(+)		タハルカ		Schiff-Giorgini 2002
Sesebi	アクエンアテン	セティ1世、ラムセス2世					Morkot 1988
Tombos	トトメス1世、アメンヘテプ2世、3世、アクエンアテン	ラムセス2世	(+)	(+)	タハルカ		Smith 2003b, 2008
Tabo	アメンヘテプ2世、トトメス4世、アメンヘテプ3世、アクエンアテン	ラムセス2世			タハルカ		Jacquet-Gordon 1999
Kawa	アメンヘテプ3世(?)、トウトアンクアメン		ラムセス7世		ピイ(?), ジャバカ、ジャバタカ、タハルカ		Macadam 1955; Welsby 1998, 2002
Kurgus	トトメス1世、3世	ラムセス2世					Davies 2001, 2003

て盛んに建築活動が継続されてゆくことになる。ところが新王国時代末、突如として建築活動が途絶える⁵⁾。再び建築活動が開始されるのは、クシュ王国確立後にあたる第 25 王朝ピイの治世であり (Reisner 1934)、新王国時代末から約 500 年におよび考古資料が欠落する。また同様の欠落現象は、第 3 キャタラクトに位置するケルマ (Kerma) でも確認されている。ケルマは、エジプトの支配に対する最大の抵抗勢力を擁した遺跡であり (Reisner 1923)、新王国時代を通じて盛んに建築活動が継続されてゆくが、新王国時代末から約 400 年におよび考古資料が欠落する⁶⁾。上記 2 つの遺跡に共通しているのは、いずれも新王国時代に数多くの建築活動が行われていながら、第 3 中間期において考古資料が完全に欠落する点である。さらに、こうした第 3 中間期における考古資料の欠落は、以上に挙げた遺跡に限定されたものではなく、ヌビア全域で同様に認められているのである⁷⁾ (表 1)。

ところが、21 世紀に入り本格化した上ヌビア調査⁸⁾を契機として、研究状況は大きく変わり始めている。近年になり、第 3 中間期の遺跡が次々と確認され始めたのである。その中には、ヒラト・アル＝アラブ (Hillat el Arab, Vincentelli 2006)、トンボス (Tombos, Smith 2008)、メロエ (Meroe, Grzymski 2005)、サナム (Sanam, Lohwasser in press)、カスル・イブリーム (Qasr Ibrim, Rose 2008) といった大規模な遺跡が存在し、各遺跡はいずれも、層位や土器に基づき第 3 中間期の年代が与えられている。こうした状況を受け現在では、その年代を唯一の根拠として、上記各遺跡がクシュ王国の前身勢力として見なされる傾向にあり、これら各勢力の統合をもってクシュ王国形成を説明するという大枠が提示されている (Godlewski and Łajtar 2008)。

このようにいくつかの拠点遺跡の存在が指摘されているが、一方で、クシュ王国形成前後における遺跡の具体的な変遷や、各遺跡がどのようにクシュ王国という 1 つの勢力へ統合されたかという経緯は、未だ解明されていない。各遺跡の存在が明らかになりつつあり、いわば点的な様相が捉えられ始めた今日、点をつないだ面としてのヌビア理解を目指す研究が推し進められてゆくべきである。

研究の視点

これらの点に鑑み、以下、1) ヌビア全域に存在する墓の構造、2) 第 3 中間期前後における遺跡分布の変遷、という 2 点に検討を加える。そしてその結果を踏まえ、クシュ王国形成期におけるヌビアの変動を考察する。まず章節では、ヌビア全域に存在する墓の構造を分析するが、その分析に先立ち、ヒラト・アル＝アラブで検出された 2 種類の墓に焦点を当てる。この遺跡を取り上げる理由は 2 つ存

在しており、まず 1 つは遺跡の年代である。他の第 3 中間期遺跡と異なり、ヒラト・アル＝アラブでは第 3 中間期前後における活動も確認されているため、この遺跡の検討を通じてクシュ王国形成期におけるヌビアの変動を捉えることが可能と考える。もう 1 つは、遺跡の立地である。この遺跡は、アル＝クッルとジェベル・バルカル、すなわちクシュ王国の王墓地と宗教的中心地に挟まれた地点に存在しているため、その立地から、ヒラト・アル＝アラブがクシュ王国の形成に重要な役割を果たしていた可能性が高い。

なお、以下の分析では、新王国時代、第 3 中間期に続く時代として、ナパタ期 (Napatan, 747 ～ 300BC)、メロエ期 (Meroitic, 300BC ～ AD350) という 2 つの時期を設定する⁹⁾。この理由は、第 3 中間期以後のヌビアがエジプトと異なる発展を遂げてゆく点にある。第 3 中間期まで両者は主従関係として密接に関わっているため、時代区分としては同じ枠組みを用いることが可能であるが、その後、両者の関係は次第に薄れてゆく。エジプトが地中海世界へと組み込まれてゆくのにに対して、ヌビアは、ナパタとメロエを中心地とした独自の王国を形成してゆくことになるのである。以上の理由から、エジプトの時代区分を用いて第 3 中間期以後のヌビアを扱うことは困難であるため、本稿では上記の 2 時期を設定している。

ヌビア全域における墓構造の分析

上述したように、ヌビア全域を対象とした分析に先立ち、まずはヒラト・アル＝アラブの墓構造に検討を加える。

1. ヒラト・アル＝アラブの発掘

ヒラト・アル＝アラブは第 4 キャタラクトに位置し、アル＝クッルとジェベル・バルカルのほぼ中間地点に存在している。遺跡は、カルトゥーム大学が 1988 年に発見し (Leclant and Clerc 1989)、その後カッシーノ大学が 1993 年から 2000 年にかけて調査を行った (Vincentelli 1997, 2006)。

調査の結果、ヒラト・アル＝アラブから全 19 基の墓 (ARA1-19) が検出されている (図 2)。しかし、その上部構造は完全に失われており、遺構として検出されたのは下部構造のみである。墓はいずれも、シャフト (ARA1, 4) もしくは下降階段 (ARA3, 7, 8, 10, 13, 14, 15, 16, 18, 19) を有している (図 3)。全ての墓は盗掘による攪乱を受けていたものの、発掘者によってそれぞれ新王国時代からメロエ期までの年代が与えられている (表 2)。

墓の年代を決定する上で指標とされたのが、アンフォラ (Amphora) とピルグリム・フラスコ (Pilgrim flask) である。パレスティナ地域に起源を有するとされるこれら 2 種類の土器は、時期によってその器形が著しく変化するこ

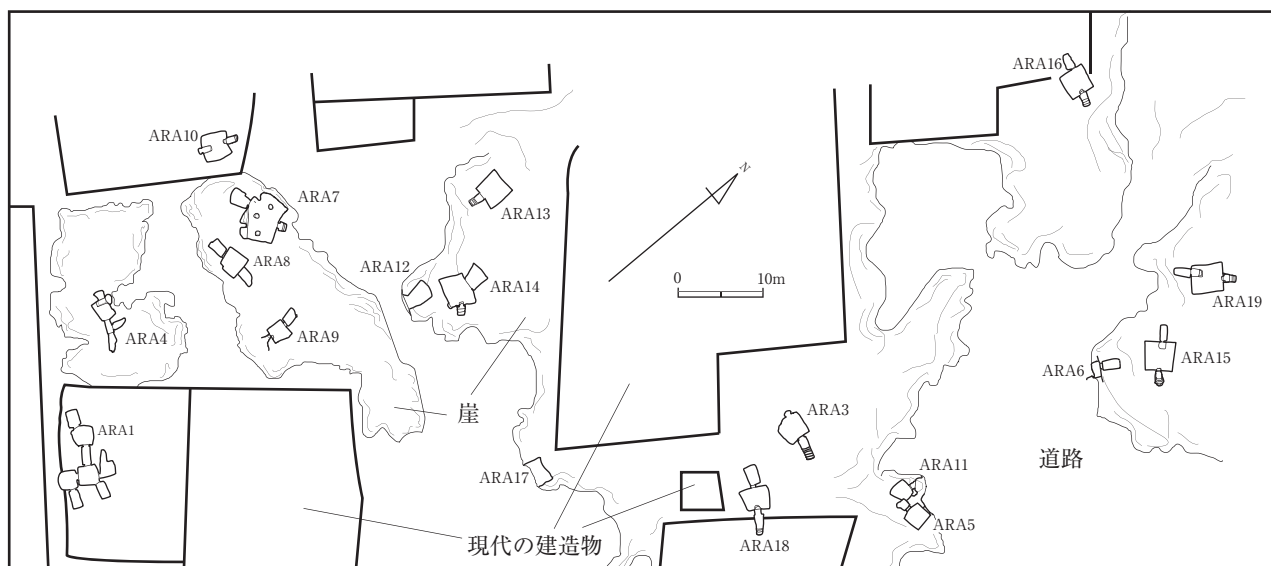


図2 ヒラト・アル＝アラブの墓分布 (Vincentelli 2006: 7に基づき作成)

表2 発掘者による墓の年代
(Vincentelli 2006: Table 1.1に基づき作成)

遺構	新王国時代 (第19・20王朝)	第3中間期	ナバタ期		メロエ期
			第25王朝	ポスト・第25王朝	
ARA1	●				
ARA2	※不明				
ARA3	●				
ARA4	●				
ARA5	※不明				
ARA6	※不明				
ARA7		●			
ARA8			●		
ARA9		●			
ARA10		●	●		●
ARA11	●				
ARA12			●		
ARA13	●	●	●		
ARA14		●	●		●
ARA15		●	●		●
ARA16		●	●		●
ARA17	※不明				
ARA18	●				●
ARA19	●	●	●		

とから、年代決定の重要な手がかりとされている¹⁰⁾。ヒラト・アル＝アラブで出土した土器全616点中、計92点が上記の器種に同定されており、各墓の年代はこれらの土器を基にして決定されている。

こうして得られた年代を根拠として、発掘者は遺跡の性格を次のように述べている。まず、第3中間期に年代付けられることから、この遺跡をクシュ王国の前身勢力と想定する。さらに発掘者は、出土遺物にエジプトやパレスティナ地域の土器が多く認められることから、ヒラト・アル＝アラブに埋葬された人物が、第3中間期にエジプトと長距離交易を行っていたこと、そして同時期、自らのヌビア伝統を排し、積極的にエジプトへ同化を図っていたことを想定する (Vincentelli 2006: 183-184)。この見解から明らかのように発掘者は、早くも第3中間期から、第4キャラクターにエジプトの影響が浸透していたと捉えることで、直

後に造営されるクシュ王墓が突如採用するエジプトの伝統を、動機付けようとしている。

ただし、ヒラト・アル＝アラブから出土した遺物の多くが、攪乱されたコンテキストから出土していることを考慮するならば、これら遺物を一括して解釈する報告者の見解は、不適切と言わざるを得ない。近年における第3中間期遺跡の急増や、同時期に年代付けられる土器の出土例に鑑みて、発掘者が示した年代自体は妥当と考えられるものの¹¹⁾、他の第3中間期遺跡を検討することなしに、長距離交易やヌビア伝統放棄を挙げエジプトとの関係を偏重する発掘者の見解は、第3中間期のヌビア内部で生じた社会変動を余りに軽視するものである。第3中間期前後における活動が確認されているこの遺跡は、クシュ王国形成に伴いヌビア内部で生じた社会変動の一端をも示しうるはずであり、ヒラト・アル＝アラブのみに埋没した上記の見解は、巨視的な立場から再検討する必要がある。

2. 分析の方法

この問題点を踏まえ、ヒラト・アル＝アラブに造営された墓を基軸として、ヌビア全域における墓構造の分析を行う。ヒラト・アル＝アラブに造営された墓と同様の構造を有する墓（以下、同種遺構）の時間的、空間的、量的な分布を捉えることによって、ヒラト・アル＝アラブの性格を再検討したい。以下では特に墓の下部構造に着目するが、その理由は、ヌビアに造営される墓の下部構造が、墓の造営年代を色濃く反映する属性として知られている点にある (Geus 1991; Bonnet 1999; el-Tayeb and Kołosowska 2005)。なお、墓の構造を対象とした議論を展開する都合上、構造の不明な墓は除外せざるを得なかった¹²⁾。

分析の基軸とすべく、まずはヒラト・アル＝アラブに造

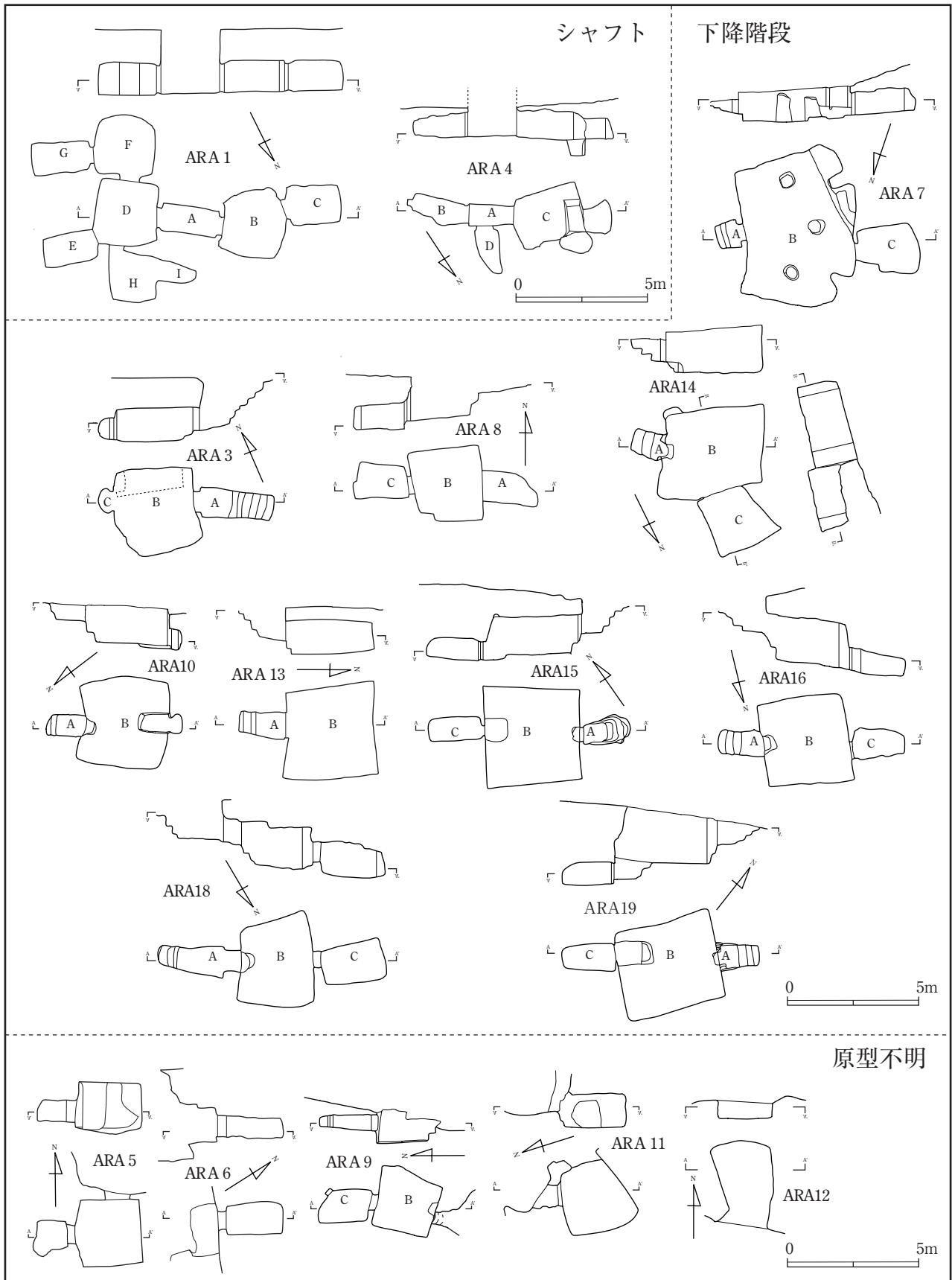


図3 ヒラト・アル＝アラブの各墓構造 (Vincentelli 2006に基づき作成 ※ARA2, 17は未報告)

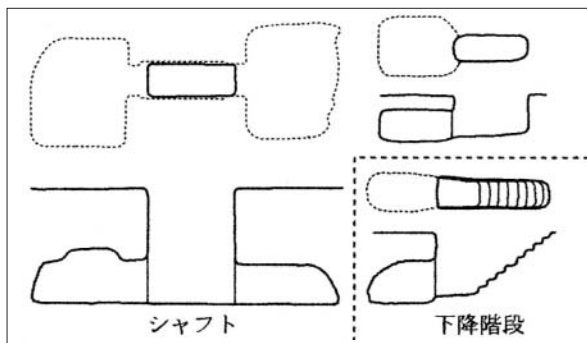


図4 ヌビアに一般的なシャフト、下降階段

営された墓の構造的特徴を抽出する。ヒラト・アル＝アラブの墓域には、シャフトを持つ墓（以下、シャフト墓）と下降階段を持つ墓（以下、下降階段墓）の2種類が存在することを先に述べたが、同様の入口部を持つ墓はヌビアでも一般的に確認されているため（図4）、それだけでは有効な指標とならない。むしろ指標として適切なのは、地下に造営された墓室そのものであり、シャフト墓と下降階段墓のいずれに関しても、ヒラト・アル＝アラブの例は特徴的な下部構造を有している。

その第一の特徴として、ヒラト・アル＝アラブのシャフト墓は、複数の墓室を接続した下部構造を有する。ヌビアに造営されるシャフト墓は、1つ、ないしは対に2つの墓室を有するものが一般的であり（図4）、複数の墓室を連

接する例はまず認められない。そして第二の特徴として、ヒラト・アル＝アラブの下降階段墓は、墓室が方形を呈した下部構造を有する。ヌビアに造営される下降階段墓は、岩盤を粗く掘り込んで墓室を造営するものが一般的であり（図4）、方形に示されているように明確な空間意識を持つ例はまず認められない。したがって、1）シャフト下部に複数の墓室を接続した墓、2）下降階段下部に方形の墓室を有する墓、の2つを基軸として、ヌビア全域における墓の検出事例中から同種遺構の抽出を試みる。

検討対象とした時代は、発掘者がヒラト・アル＝アラブの年代として提示した新王国時代からメロエ期までである（表2）。この時代幅において、ヌビア全域でこれまでに発掘されている全ての墓を、確認できた限りカウントし¹³⁾、その中からヒラト・アル＝アラブと同種遺構の抽出を行った。

3. 分析結果（表3）

以下、シャフト墓、下降階段墓に分けて記す。

シャフト墓に関しては、全160基の同種遺構を特定することができた。第一に、年代別に整理すると、新王国時代に159基、メロエ期に1基の存在を確認した。第3中間期、ナパタ期に、同様の構造を持つ墓は検出されていない。したがって、ヒラト・アル＝アラブに存在するシャフト墓（ARA1, 4）は、新王国時代に造営されたものと考えてま

表3 ヒラト・アル＝アラブと同種遺構の分布（北から）

地域	遺跡	シャフト墓					下降階段墓					文献
		新王国時代	第3中間期	ナパタ期	メロエ期	計	新王国時代	第3中間期	ナパタ期	メロエ期	計	
第1・第2 キヤタ ラクト (以下略)	Shellal	1										Reisner 1910: Fig. 41
	Hesa									1		Reisner 1910: Figs. 47-48
	Dabod	1					2					Reisner 1910: 174-176, Pl. 17A
	Siali						1					Reisner 1910: Fig. 193
	Bugga	2										Reisner 1910: 281-282, Fig. 234
	Kuban	16										Firth 1927: passim
	Maharraqa	1										Firth 1927: 172
	Wadi es Sebua						1					Emery et al. 1935: Fig. 79A
	Masmas	2				144					34	Emery et al. 1935: Fig. 33
	Aniba	70					21					Almagro et al. 1964: Fig. 57
	Toshka	1										Steindorff 1937: passim
	Qustul	2										Simpson 1963: Figs. 3, 4
	Serra	3										Williams 1992: Figs. 101, 134
	Debeira	4										Williams 1993: Figs. 100, 103, 114
2・3	Ashkeit	1										Säve-Söderbergh et al. 1991: Pls. 55, 182, 185, 187
	Buhen	40					8					Säve-Söderbergh 1981: Pl. 48
	Gamai				1							Randall-MacIver et al. 1911: passim
	Semna	1										Bate et al. 1927: Pl. 54-1
	Kumma	1				16					2	Dunham et al. 1960: Fig. 36
	Sai	2										Dunham et al. 1960: Fig. 67
3・4	Sedeinga								1			Minaut-Gout 1997: Fig. 2
	Soleb	11					1					Janot et al. 1997: Fig. 1
	El Kurru								12			Schiff-Giorgini 1971: passim
	Jebel Barkal					0			6	8		Dunham 1950: passim
5	Sanam								34			Dunham 1957: passim
	Nuri								68			Griffith 1923: passim
	Meroe					0			16	42	58	Dunham 1955: passim
	計	159	0	0	1	160	34	0	137	51	222	Dunham 1957: passim, 1963: passim

ず問題なかろう。第二に、地域別に整理すると、第1～第2キャタラクトに144基、第2～第3キャタラクトに16基の存在を確認した。第3～第5キャタラクトに、同様の構造を持つ墓は検出されていない。さらに、各地域においても特定の遺跡にシャフト墓が集中する。第1～第2キャタラクトにおいてはクバン (Kuban)、アニバ (Aniba)、ブヘン (Buhen)、第2～第3キャタラクトにおいてはソレブ (Soleb) へとシャフト墓が集中し、この4遺跡だけで全基数の86%を占めている¹⁴⁾。ここから、ヒラト・アル＝アラブのシャフト墓を造営した集団が、以上の4遺跡と造営技術を共有していた可能性を看取できる。また、他の遺跡においても広くシャフト墓の存在を確認したが、その分布範囲の広さとは対照的に、各遺跡に存在する数は極めて少ない。

下降階段墓に関しては、全222基の同種遺構を特定することができた。第一に、年代別に整理すると、新王国時代に34基、ナパタ期に137基、メロエ期に51基の存在を確認した。第3中間期に、同様の構造を持つ墓は検出されていない¹⁵⁾。したがって、ヒラト・アル＝アラブに存在する下降階段墓 (ARA3, 7, 8, 10, 13, 14, 15, 16, 18, 19) は、ナパタ期に造営されたものである可能性が高い。ただし、新王国時代とメロエ期に多数存在することも事実であり、現時点で決定的な証拠ではない。第二に、地域別に整理すると、第1～第2キャタラクトに34基、第2～第3キャタラクトに2基、第3～第4キャタラクトに128基、第5キャタラクトに58基の存在を確認した。さらに、各地域においても特定の遺跡に下降階段墓が集中する。第1～第2キャタラクトにおいてはアニバ、ブヘン、第3～第5キャタラクトにおいてはアル＝クッル、ジェベル・バルカル、サナム (Sanam)、ヌリ (Nuri)、メロエの5遺跡へ下降階段墓が集中し、この7遺跡だけで全基数の97%を占めている¹⁶⁾。また、上記遺跡を除きほとんど確認されていないことから (222基中7点)、下降階段墓の造営に限定性が伴っていた可能性を看取できる。第三に、新王国時代に年代付けられる下降階段墓の大部分は第1～第2キャタラクトに偏在し (34基中33点)、ナパタ期とメロエ期に年代付けられる下降階段墓の大部分は第3～第5キャタラクトに偏在する (188基中186点)、という対照的な地域性が明らかとなった。この地域性から、下降階段墓には、1) 新王国時代の下ヌビアに造営されたものと、2) ナパタ期、メロエ期の上ヌビアに造営されたもの、という2種類の系譜が示唆される。このうち、後者の系譜に属する下降階段が存在する第3～第5キャタラクトの遺跡は、サナムを除き全てクシュ王国の王墓地である (Edwards 2004: 112ff)。

遺跡分布の変遷とヌビアの変動

ヒラト・アル＝アラブの墓構造を基軸とした分析から、いくつかの傾向を看取することができた。だが、この分析結果から当時の様相を解釈するためには、さらにヌビア全域の遺跡分布を把握することが不可欠となる。なぜなら、第3中間期における考古資料の欠落状況が示しているように、クシュ王国の形成前後で遺跡数に大きな増減が予想されるためである。したがって、本節ではさらに分析を重ね、ヌビア全域における遺跡分布の検討を行う。

1. 分析の方法

ヌビア遺跡救済キャンペーンによって、1960年代に下ヌビアが集中的に調査されたのと対照的に、これまで上ヌビアは、王墓地を除く大部分が未調査のままであった。そのため、上ヌビアには第3中間期の遺跡が本当に存在しないのか、それとも単に調査不足が原因なのかが問題となってきた (Grzymski 1987: 5; Welsby 1996: 13)。これに対して今日では、1990年代から増加した多くの調査のおかげで、第3～第4キャタラクト全域の遺跡分布が把握可能な状況にある (e.g. Vila 1975-9; Edwards and Osman 1992, 1993; Welsby 2001, 2003; Żurawski 2003; Paner and Borcowski 2007)¹⁷⁾。以上の資料を従来の研究に加味することで、ヌビア全域における遺跡分布を通時的に捉えることが可能となる。

2. 分析結果 (図5)

新王国時代においては228遺跡を確認した。第3キャタラクトの南北間で遺跡分布に大きな差異が認められ、第3キャタラクト以北ではナイル川に沿って遺跡の集中域が多数存在するのに対し、第3キャタラクト以南では遺跡の集中域が存在せず疎らな分布を示す。こうした分布傾向の差異は、第3キャタラクトの南北間で異なる人間活動が行われていたことを示唆している。

第3中間期においては37遺跡を確認した。遺跡数が著しく減少し、第3キャタラクト以北では、新王国時代に多数存在していた遺跡が消滅することになる。一見すると、この変化は下ヌビアの放棄を示唆しているかのようだが、上述したように、近年上ヌビアで第3中間期の遺跡が検出され始めていること、また下ヌビアの発掘がほぼ全て1960年代以前に行われたものであることに鑑みれば、下ヌビアにも第3中間期の遺跡が存在していたと想定すべきであろう。事実、下ヌビアのカスル・イブリーム (Rose 2008) やデベイラ (Debeira, Lohwasser pers. comm.) では、第3中間期に年代付けが可能な遺構が確認されている。これに対して第3キャタラクト以南では、デッバ (Debba) 付近に遺跡の集中域が出現する。デッバは、

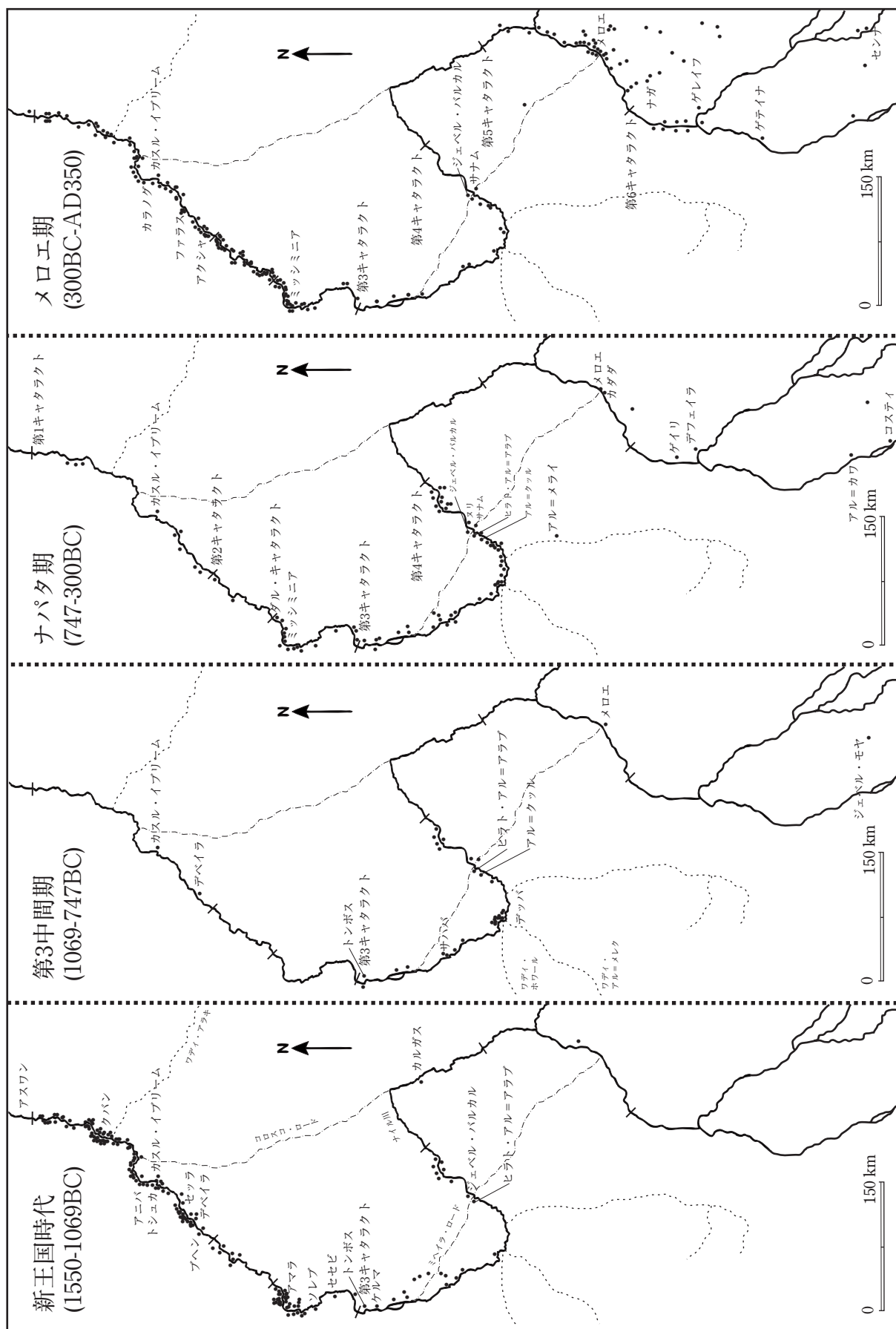


図5 ヌビアにおける遺跡分布の変遷(左より新王国時代、第3中間期、ナパタ期、メロエ期)

サハラ西部へ続く2つのワディ、ワディ・ホワール (Wadi Howar) とワディ・アル＝メレク (Wadi el Milk) の分岐点に存在しており、近年では、第3中間期に年代付けが可能な神殿も検出されている (Żurawski 2003: 243-249)。以上の点に加え、この当時、上記2つのワディがナイル川支流として機能していた可能性に鑑みれば、デッバが何らかの中心的な遺跡となっていた可能性が高い。だが現時点では証拠に乏しく、可能性の指摘に留めざるを得ない。

ナパタ期においては82遺跡を確認した。未だまばらな遺跡分布を示すものの、ヌビア全域で遺跡数が再び増加してゆき、第3キャタラクト以北ではダル・キャタラクト周辺に遺跡が集中する。これに対して第3キャタラクト以南では、第3中間期に局所的であった遺跡分布が均一化してゆく。ナパタ期は、第25王朝創立に伴いクシュ王国が確立した時期であり、アル＝クッルやヌリ、ジェベル・パルカルといった多数の王墓地の出現が示すように、第4キャタラクトがクシュ王国の中心地として確立してゆく様子が伺える。

メロエ期においては213遺跡を確認した。それまで第3～第4キャタラクトに集中していた遺跡は南北に分散し、第3キャタラクト以北では遺跡数が大幅に増加するのに対し、第3キャタラクト以南では、遺跡の集中域が第5～第6キャタラクトへ新たに出現する。この時期、アル＝クッルやヌリといった王墓地が放棄されてゆくのと同時に、新たな王墓がメロエへ出現する (Dunham 1957, 1963)。以後、大規模な神殿や居住域がメロエに造営されてゆき (Török 1997)、この地が新たなクシュ王国の中心地として確立してゆくことになる。

クシュ王国形成に伴う上ヌビアの変動

以上、ヌビア全域に存在する墓の構造、第3中間期前後における遺跡分布の変遷、という2点に着目して検討を行った。ここで諸分析結果を総合し、とりわけクシュ王国の直接的な発生地である上ヌビアを中心として、クシュ王国形成に伴う変動を考察する。

1. クシュ王国形成期 (新王国時代～第3中間期)

まず新王国時代においては、第3キャタラクトの南北間で遺跡分布に差異が認められることを既に指摘した。この分布差を解釈するにあたっては、第3キャタラクト南北における支配体制の差、環境の差、交通手段の差など、多数の可能性を挙げる事が可能である。しかし、ヒラト・アル＝アラブの分析結果と照合してみると、とりわけ支配体制が遺跡分布に大きく影響していることが明らかとなる。なぜなら、ヒラト・アル＝アラブと同種のシャフト墓が集

中するクバン、アニバ、ブヘン、ソレブの4遺跡は、以下に示すように、エジプトによるヌビア支配の拠点遺跡として知られており、さらには、これら遺跡と重なるようにして遺跡の集中域が存在しているからである。なお、ここから、ヒラト・アル＝アラブと同種のシャフト墓は、エジプトの影響を強く反映したものである可能性を看取できる。

これまでの研究から、エジプトによるヌビア支配はいくつかの拠点遺跡から実践されていたことが判明している (i.e. Steindorff 1935: 11)。まず下ヌビアでは、古代名バキ (Baki)、ミアム (Miam)、テクト (Teh-Khet) の少なくとも3つが支配拠点として知られており、これらはそれぞれクバン (Griffith 1926)、アニバ (Steindorff 1937)・トシュカ (Toshka, Simpson 1963)、デベイラ・セッラ (Serra, Säve-Söderbergh 1991) に存在していたことが確認されている。そして上ヌビアでは、古代名こそ不明であるものの、アマラ (Amara, Spencer 1997)、ソレブ (Schiff-Giorgini 1971)、セセビ (Sesebi, Morkot 1988)、トンボス (Smith 2003b) といった支配拠点が確認されている。ヒラト・アル＝アラブと同種のシャフト墓が集中する遺跡のうち、唯一、ブヘンは上記いずれの拠点遺跡にも該当していないが、ブヘンも同じく支配の要衝であったことは、当地に造営された巨大な要塞から明らかである (Emery et al. 1979)。こうした点を念頭において、さらに新王国時代の遺跡分布と照合してみると、第3キャタラクト以北、とりわけアマラより北では支配拠点と遺跡集中域が良く一致するのに対して、第3キャタラクト以南では同様の一致を確認することができない。以上の議論を踏まえると、第3キャタラクト南北間の分布差が支配体制の差を反映していること、換言すれば、上下ヌビアの支配体制が異なっていた可能性が浮かび上がるのである。上下ヌビアにおける支配体制の差は、文献資料を用いた研究によって早くから指摘されていた点であり (Morkot 1987, 2001)、近年では考古資料を用いた研究によっても同様の指摘がなされている (Smith 2003a, 2003b)。こうした点からも、上下ヌビアの支配体制が異なっていた可能性は高い。

そして新王国時代末、エジプトの衰退に伴いヌビアは支配から解放されてゆく (Redford 2004: 54-57)。後のクシュ王国中心地である第4キャタラクトに、クシュ王国確立以前からヒラト・アル＝アラブが形成されていることは、このエジプト支配からの解放と無関係ではあるまい。両者の関係性を検討するには、まずもってエジプトが第4キャタラクトを放棄した時期、そしてヒラト・アル＝アラブが形成された時期を考慮しなければならないが、これと関連して筆者は既に、ヒラト・アル＝アラブの形成を担った集団がクバン、アニバ、ブヘン、ソレブの4遺跡と関与していた可能性を指摘した。だがさらに、ナイル川を利用した

水上交通がヌビアにおいて不可欠であったことに鑑みれば、とりわけ密接な関係を有していたと想定される遺跡は、上記4遺跡で最も南に存在するソレブへ絞り込むことができる。したがってここから、墓構造の共通性を手がかりとして、新王国時代当時、ソレブの位置する第3キャタラクトと、ヒラト・アル＝アラブの位置する第4キャタラクトが密接な交流関係にあった可能性を指摘できる。

第3～第4キャタラクト間の交流関係を考察する上で肝要な遺跡が、第4キャタラクトに位置するジェベル・バルカルである。ジェベル・バルカルは、トトメス3世の治世に建築活動が開始され、ラムセス2世の治世に放棄されるが (Kendall 2004)、ここで留意すべきは、ジェベル・バルカルが、エジプト国家神であるアメン神の信仰中心地だった点である (Reisner and Reisner 1933)。これほど重要な遺跡をエジプトが放棄することは、とりもなおさず、ジェベル・バルカルの位置する第4キャタラクト全域が放棄されていたと考えざるを得ない。したがって、エジプトによる第4キャタラクトの放棄が、ヒラト・アル＝アラブの形成に関与していたことを前提するならば、必然的にその時期は、エジプトがジェベル・バルカルを放棄するラムセス2世前後の時期に求めることが可能となる。

だが、ヒラト・アル＝アラブのさらなる検討は、ヒラト・アル＝アラブが形成された時点で、エジプトが第4キャタラクトを既に放棄していた可能性を示唆している。その傍証となるのが、シャフト墓 ARA1 内部に描かれた壁面装飾の特殊性である。ARA1 は、ヒラト・アル＝アラブにおいて唯一、壁面装飾が描かれた墓であるが、これまで第4キャタラクトで確認されてきた同様の墓は、1) その全てが、クシュ王国の王墓地に造営された下降階段墓内部に描かれた例であり、2) その壁面装飾自体も、エジプトの成熟された描画技術を用いて描かれたものであった (e.g. Dunham 1950: Pl. IX, 1955: Pl. X; Welsby 1996: Pl. 1)。これに対し、ARA1 は、1) 第4キャタラクトでも唯一、シャフト墓内部に壁面装飾が描かれた例であり、2) その壁面装飾 (図6) 自体も、レジスターライン (壁面天地の区画線) やフリーズ (壁面上部の装飾帯) といったエジプト由来のモチーフが採用されているものの、エジプトと比べはるかに未熟な描画技術を用いて描かれているのである (cf. Hawass 2006)。以上に対比した2つの例は、ほとんど同一地域に造営されているにもかかわらず、ヒラト・アル＝アラブとその他遺跡、さらに述べればシャフト墓と下降階段墓において、対照的な描画技術が用いられたという事実を示している。こうした対照性の背景には、様々な理由を想定することが可能であるものの、ヒラト・アル＝アラブを除く全ての例が、エジプトの伝統を受容した第25王朝以降の王墓地に存在することに鑑みれば、上



図6 ARA1 壁面装飾 (the Archaeological mission of the university of Cassino-Italy)

述した対照的な描画技術は、エジプトから受容する影響力の強弱を反映したものと捉えるのが妥当である。したがって、その描画技術に限って述べるならば、シャフト墓 ARA1 内部に描かれた壁面装飾の特殊性は、同遺跡にシャフト墓が造営された時点でエジプトの影響力が非常に弱まっていたこと、すなわち、エジプトが第4キャタラクトを既に放棄していた可能性を示唆しているのである。

これまでに展開した議論をまとめるならば、新王国時代における上ヌビアの状況に関して、現時点では次のような一連の事象を描くことができる。1) 新王国時代におけるヌビア支配が上下ヌビアで異なっていた、2) 新王国時代末、ジェベル・バルカルに象徴されるように、エジプトが第4キャタラクトを放棄する、3) こうしてエジプトの支配から解放された第4キャタラクトにおいて、ヒラト・アル＝アラブが一勢力を形成してゆく。なお、エジプトが第4キャタラクトを放棄するラムセス2世前後の時期に、ヒラト・アル＝アラブにシャフト墓が造営されることになるが、その墓構造がエジプトの影響を強く反映するものである一方、墓内に描かれる壁面装飾はエジプトの影響からの乖離を反映するものである。これら相反する2つの要素が1つの遺構に混在している理由に関しては、未だ不明とせざるを得ないが、新王国時代末にエジプトの支配から解放されてゆくヌビアの社会変動を、直接に反映するものと考えられる。

第3中間期には、上述のごとく、クシュ王国の前身勢力と推定される拠点遺跡が上ヌビア各地に形成される。既に発掘不可能な下ヌビアは保留せざるを得ないが、上ヌビアの遺跡分布は、デッバも拠点遺跡の1つであった可能性を示唆している (図5)。そして同時期、こうした拠点遺跡の1つであるアル＝クッル (Dunham 1950) やトンボス (Smith 2008) において、ヌビアの伝統的な墓形態である墳丘墓が再び造営されることになる。伝統的墳丘墓の造営は、ヌビアが再び自らの文化伝統に回帰してゆくことを象

徴するものである。したがって、上述した描画技術の未熟さを合わせ踏まえるならば、ヒラト・アル＝アラブの発掘者が主張するような、第3中間期における上ヌビアとエジプト間の密接な交流関係を想定することは困難であり、むしろ両者の関係性は弱まっていたと考えられるのである。

また、同じく第3中間期には、ヒラト・アル＝アラブと同種遺構の造営に大きな変異が生じる。新王国時代まで数多く造営されていた同種シャフト墓が消滅してゆくことに加え、それまで下ヌビアに限定して造営されていた同種下降階段墓は、一転、上ヌビアに限定して造営されてゆくことになる(表3)。この分析結果からは、2つの傾向を読み取ることができる。まず1つは、第3中間期を境としてヌビア全域の墓構造が一変することである。あたかもこの変化は、クシュ王国の形成前後で人間集団が一変した可能性を示唆している。そしてもう1つは、下降階段墓には、1) 新王国時代の下ヌビアに造営されたものと、2) ナパタ期、メロエ期の上ヌビアに造営されたもの、という2つの系譜が認められることである。このうち、両系譜の間にいかなる相関関係が存在しているのか、そして、後者の系譜が第3中間期まで遡って年代付けられるものであるかは、現時点において保留せざるを得ない。ただし、従来ナパタ期に年代付けられていた上ヌビアの遺跡が、第3中間期まで遡ることを指摘した近年の研究に鑑みて(Gerharz 1994: 55ff; Lohwasser in press)、後者の系譜が第3中間期に萌芽した可能性は高い。

2. クシュ王国確立期(ナパタ期～メロエ期)

ナパタ期には、王墓地であるアル＝クッルやヌリの台頭が示すように、ヒラト・アル＝アラブは求心性を失ってゆく。この対照的な盛衰が、両者の対立の帰結であるのか、それとも単なる遷都に過ぎないのかは定かでないが、いずれにせよこの盛衰は、クシュ王国形成に伴う上ヌビアの社会変動を直接に反映するものと考えられる。

しかし、ヒラト・アル＝アラブはただ衰退してゆくだけではない。上述のように、ヒラト・アル＝アラブと同種の下降階段墓は、その後クシュ王国の王墓地(アル＝クッル、ジュベル・パルカル、ヌリ、メロエ)に限定して造営されてゆくようになるのである(表3)。これは、ヒラト・アル＝アラブと同種の下降階段墓、すなわち下降階段下部に方形の墓室を有する墓の構造が、クシュ王家を特徴付ける属性として、紀元後にいたるまで約1000年以上も受け継がれてゆくことを意味している。換言するならば、ヒラト・アル＝アラブがクシュ王国の王墓地もしくはそれと同等の流れを汲む遺跡であること、さらにはヒラト・アル＝アラブに造営された下降階段墓の埋葬者が、クシュ王もしくは王家と関連する突出した人物であったことを直接に示

しているのである¹⁸⁾。

以上のように確立したクシュ王国は、メロエ期になり新たな展開を見せる。遺跡分布に認められるように、それまでクシュ王国の中心地であった第4キャタクトは求心性を失い、一方は新たな王墓地であるメロエへ、そしてもう一方は下ヌビアへと移動してゆくのである(図5)。こうした二極化がいかなる社会変動を反映しているのかは未だ不明であるが、近年の研究は、メロエ期下ヌビアの社会階層が多様化していた可能性を指摘している(Adams 2008: 20)。この多様化がクシュ王国の内部分裂を示しているのか、それとも単なる年代的变化を示しているのかは、今後検討されるべき課題である。

ヒラト・アル＝アラブの考古資料を主軸として以上に素描した、クシュ王国形成に伴うヌビアの諸変動は、当時生じていた社会変動のごく一部でしかない。この点、文献資料による補完が期待されるが、クシュ王国形成期に言及しているとされる重要な文献資料でさえ、現段階では何一つ確かな情報を提供していない¹⁹⁾。こうした状況においては、考古資料からの検証が今後も重要となってゆくことであろう。

おわりに

本稿ではまず、第3中間期ヌビアにおける考古資料の欠落状況を整理したのち、ヒラト・アル＝アラブに着目し、その墓を基軸としてヌビア全域における同種遺構の抽出を行った。続いて、これを遺跡分布と照らし合わせることで、とりわけクシュ王国の直接的な発生地である上ヌビアを中心として、クシュ王国形成に伴う諸変動を考察した。その結果、第3中間期を境として、ヒラト・アル＝アラブと同種のシャフト墓と下降階段墓は、相互に排他的な分布域を占めることを明らかにした。この分析結果は、クシュ王国の形成前後で人間集団が一変した可能性を示唆している。また一連の分析結果は、ヒラト・アル＝アラブに造営されたシャフト墓が、ソレブやクバン、アニバ、ブヘンといった、新王国時代におけるヌビア支配拠点の系譜を引く可能性を示唆している。しかし、第3中間期に上ヌビアへと展開した遺跡が、その後いかなる過程を経てクシュ王国という1つの勢力へ統合されたかという更なる動態の解明は、今後の課題として残された。国家形成に伴う細かな社会変動を捉えるためには、細微な議論に耐えうる精密な編年の設定が不可欠である。

謝辞

本稿を草するにあたっては、指導教授の近藤二郎先生より数多くのご指導を賜りました。カッシーノ大学 Irene Vincentelli 教授からは写真資料の転載許可を、ベルリン自由大学 Angelika Lohwasser 博士からは玉稿を賜り、筆者の稚拙な質問に対してもその都度、両氏は適

切なご教示を下さいました。また、早稲田大学考古学研究室、早稲田大学エジプト学研究所の先学諸氏からは多くのご助言を、そして査読の労を引き受けて下さった先生方からは的確なご指摘を頂戴いたしました。記して感謝申し上げます。

註

- 1) 本稿で使用する絶対年代は、Welsby and Anderson 2004 を参照している。
- 2) 本稿では、第21王朝から第24王朝を指して第3中間期と呼称する。
- 3) あえてこう述べる理由は、北部スーダンに居住する現在のヌビア人と区別するためである。今日ヌビア人は、ヌビア語を話す集団として規定されるが、本稿で意図するヌビア人は、あくまで現在のヌビア人と異なる人間集団であることを了解されたい。
- 4) ラムセス11世治世末に下ヌビアで生じたパネヘシとヘリホルの争いを指す。この問題は現在でも研究者間で意見の一致をみない。詳細は Török 1995b: 19n30; Taylor 1998 を参照。
- 5) アメンヘテプ2世、トトメス4世、アメンヘテプ3世、アクエンアテン、セティ1世、ラムセス2世の活動が確認されている (Kendall 2004)。なお、建築活動は伴わないものの、攪乱されたコンテキストから1点だけラムセス9世の遺物が出土している (Reisner 1931: 81)。そのため、この時点までエジプトがジュベル・バルカルを保持していた可能性も存在する。
- 6) 現在、新王国時代最古の証拠として確認されているのは、トトメス1世の要塞跡である (Bonnet and Ferrero 2006: 28)。その後もトトメス3世、アメンヘテプ2世、トトメス4世、アクエンアテン、セティ1世、ラムセス2世、ラムセス3世の建築活動が継続されてゆくが、新王国時代末に建築活動が途絶える。再び建築活動が開始されるのは、クシュ王国確立後にあたる第25王朝シャバカの治世である (Bonnet and Valbelle 2004, 2006)。
- 7) 文献資料も例外ではない。新王国時代ヌビア支配の傍証であるヌビアからの徴税記録も、ラムセス11世を最後として途絶えることになる (Redford 2004: 58)。
- 8) 2009年完成予定のマラウィ (Merowe) ダム建設に先駆け、開始されたものである。ダム完成時には、巨大な人造湖が形成される予定であり、現在、第4キャタラクト約720km²の範囲に存在する遺跡が水没の危機にさらされている (Paner 2005)。これら遺跡を救済すべく、第4キャタラクトにおいて10を超える調査隊が調査を継続中である。
- 9) ナパタ期は、クシュ王国確立の証左とされる第25王朝創立をもって始まる。ナパタ期とメロエ期を区分する基準は、1) 王墓の遷地 (ナパタからメロエ)、2) 文字体系の変化 (ヒエログリフからメロエ文字)、3) 物質文化の変化 (無文土器から彩文土器など)、の3点である。詳細は Hintze 1978; Priesse 1978 を参照。なお、ナパタとは古代名であり、第4キャタラクト一帯の地域を指す (Griffith 1922: 77-79)。
- 10) アンフォラは当初、短い頸部に楕円形の胴部を有するが、時期が下るにつれて全体に対し頸部の占める割合が増加し、細身となってゆく (Holthoer 1977: 97; Aston 1996, 2004: 206)。また、ピルグリム・フラスコは当初、口縁付近に把手を有するが、時期が下るにつれて把手の位置が下降してゆき、やがて胴部へ付属するようになる (Aston 1996)。
- 11) 発掘者が墓の年代決定に使用した多くの土器もまた、攪乱されたコンテキストから出土したものであるが、再検討の手がかりとすべき第3中間期の考古資料自体まだ蓄積が少ないため、現時点で発掘者が提示した年代を疑う余地はない。ただし、今後の資料蓄積によって、年代が修正される可能性が存在すること

には、留意しておく必要がある。

- 12) 構造が不明な原因は、墓が未報告であること (ARA2, 17)、残存状態の悪さから原型が推定不可能であること (ARA5, 6, 9, 11, 12) による。
- 13) ヒラト・アル＝アラブと同種遺構の分布から評価を加える以上、全ての墓を検討対象とすることが最低限必要となる。その対象となった墓の総数は9044基 (新王国時代: 2952基、第3中間期: 264基、ナパタ期: 1282基、メロエ期: 4546基) である。
- 14) 遺跡別の割合は、クバン: 10%、アニバ: 44%、プヘン: 25%、ソレブ: 7%である。
- 15) 時代別の割合は、新王国時代: 15%、第3中間期: 0%、ナパタ期: 62%、メロエ期: 23%である。
- 16) 遺跡別の割合は、アニバ: 10%、プヘン: 4%、アル＝クッ: 5%、ジュベル・バルカル: 6%、サナム: 15%、ヌリ: 31%、メロエ: 26%である。
- 17) 近年では、第5キャタラクトにおける調査も開始されており (Mallinson et al. 1996; el-Amin and Edwards 2000)、新王国時代の遺跡が検出され始めている。そのため、従来のようにカルガス (Kurgus) を、新王国時代における最南端の遺跡として論じることが不可能となりつつある。
- 18) 仮に、ヒラト・アル＝アラブを王墓地と同等に捉える筆者の見解が的を射ているとすれば、第25王朝創立に伴い、クシュ王国の王墓はアル＝クッへ遷地したことになる。しかし現在では、王墓の遷地をもって政治的中心の遷都と捉えること、さらには、そもそも遷都の措定自体が困難と言わざるを得ない。なぜなら、1) 王墓の遷地は、必ずしも政治的中心の遷都を伴うものとは限らず、また、2) メロエ以外の王墓地においては、政治的中心地を示唆するような大規模な居住域が検出されていないからである。そのため、王墓の遷地がクシュ王国をとりまく政情を反映している可能性は高いものの、現時点において、これら諸要素間に明瞭な相関関係を見出すことは困難である (包括的な議論は Hintze 1973 を、最新の問題提起は Kendall 2008; T r k 2008: 159ff を参照)。
- 19) クシュ王国形成期の様相に言及しているとされる文献資料は、現在2点存在している。まず1つはアスペルタ (Aspelta, 593-568 BC) の即位碑であり (Eide et al. 1994: 232-244)、これはクシュ王家に帰属する唯一の家系図である。碑文には、アスペルタを起点として女系出自で7世代前までの家系図が記されているが、人物名ではなく Royal sister, Mistress of Kush という称号が記されるのみである。それゆえ、現在でも各世代の人物同定が困難となっている。もう1つは、セムナ (Semna) に存在するカティマラ (Katimala) の碑文である (Eide et al. 1994: 35-41)。問題は、極めて難解なその文章にある。既に数多くの研究が蓄積されているが (Darnell 2006)、碑文自体の年代すら未だ意見の一致をみない。これら資料は、クシュ王国形成期へ迫る貴重な文献資料となり得るが、現時点でもその史料的価値は不明である。

参考文献

- Adams, W. Y. 1964 Post-pharaonic Nubia in the Light of Archaeology, I. *Journal of Egyptian Archaeology* 50: 102-120.
- Adams, W. Y. 1977 *Nubia, Corridor to Africa*. Princeton, Princeton University Press.
- Adams, W. Y. 1984 The First Colonial Empire: Egypt in Nubia, 3200-1200. *Comparative Studies in Society and History* 26: 36-71.
- Adams, W. Y. 2008 Social Class and Local Traditions in Nubia: The Evidence from Archaeology. In W. Godlewski and A. Łajtar (eds.),

- Between the Cataracts I*, 19-32. Warsaw, Warsaw University Press.
- Almagro, M., E. Ripoll and L. A. Monreal 1964 *Las Necrópolis de Masmás, Alto Egipto*. Madrid, Ministerio de Asuntos Exteriores.
- Aston, D. A. 1996 *Egyptian Pottery of the Late New Kingdom and Third Intermediate Period*. Heidelberg, Heidelberger Orientverlag.
- Aston, D. A. 2004 Amphorae in New Kingdom Egypt. *Ägypten und Levante* 14: 175-214.
- Bates, O. and D. Dunham 1927 Excavations at Gammai. *Harvard African Studies* 8: 1-122.
- Blackman, A. M. 1913 *The Temple of Derr*. Cairo, Institut Français d'Archéologie Orientale.
- Bonnet, C. 1999 The Funerary Traditions of Middle Nubia. In D. A. Welsby (ed.), *Recent Research in Kushite History and Archaeology*, 1-18. London, British Museum Press.
- Bonnet, C. and N. Ferrero 2006 Le Royaume de Kerma. In J. Chappaz (ed.), *Kerma et archéologie nubienne*, 21-35. Genève, Infolio.
- Bonnet, C. and D. Valbelle 2004 Kerma, Dokki Gel. In D. A. Welsby and J. R. Anderson (eds.), *Sudan: Ancient Treasures*, 109-113. London, British Museum Press.
- Bonnet, C. and D. Valbelle 2006 *The Nubian Pharaohs: Black Kings on the Nile*. Cairo, American University in Cairo Press.
- Caminos, R. A. 1974 *The New Kingdom Temples of Buhen*. 2 vols. London, Egypt Exploration Society.
- Caminos, R. A. 1998 *Semna-Kumma*. 2 vols. London, Egypt Exploration Society.
- Darnell, J. C. 2006 *The Inscription of Queen Katimala at Semna*. New Haven, Yale Egyptological Society.
- Davies, W. V. 2001 Kurgus 2000: The Egyptian Inscriptions. *Sudan & Nubia* 5: 46-58.
- Davies, W. V. 2003 Kurgus 2002: Report on the Archaeological Work. *Sudan & Nubia* 7: 58-61.
- Davies, W. V. 2004 Jebel Doshā: The Egyptian Inscriptions. *Sudan & Nubia* 8: 60-63.
- Dunham, D. 1950 *El Kurru*. Boston, Museum of Fine Arts.
- Dunham, D. 1955 *Nuri*. Boston, Museum of Fine Arts.
- Dunham, D. 1957 *Royal Tombs at Meroe and Barkal*. Boston, Museum of Fine Arts.
- Dunham, D. 1963 *The West and South Cemeteries at Meroe*. Boston, Museum of Fine Arts.
- Dunham, D. 1967 *Uronarti, Shalfak, Mirgissa*. Boston, Museum of Fine Arts.
- Dunham, D. and J. M. A. Janssen 1960 *Semna, Kumma*. Boston, Museum of Fine Arts.
- Edwards, D. N. 2004 *The Nubian Past: An Archaeology of the Sudan*. London, Routledge.
- Edwards, D. N. and A. Osman 1992 *Mahas Survey Reports 1*. Cambridge, Computing Service Print Room, available online at <<https://lra.le.ac.uk/bitstream/2381/518/1/Mahas1991-1.pdf>> (accessed 26 February 2008).
- Edwards, D. N. and A. Osman 1993 *Mahas Survey Reports 2*. Cambridge, Computing Service Print Room, available online at <<https://lra.le.ac.uk/bitstream/2381/517/1/Mahas1990-2.pdf>> (accessed 26 February 2008).
- Eide, T., T. Hägg, R. H. Pierce and L. Török 1994 *Fontes Historiae Nubiorum I*. Bergen.
- el-Amin, Y. M. and D. N. Edwards 2000 Archaeological Survey in the Fifth Cataract Region. *Sudan & Nubia* 4: 44-50.
- el-Tayeb, M. and E. Kołosowska 2005 Burial Traditions on the Right Bank of the Nile in the Fourth Cataract Region. *Gdańsk Archaeological Museum African Reports* 4: 51-74.
- Emery, W. B. and L. P. Kirwan 1935 *The Excavations and Survey between Wadi es-Sebua and Adindan*. 2 vols. Cairo, Government Press.
- Emery, W. B., H. S. Smith and A. Millard 1979 *The Fortless of Buhen: The Archaeological Report*. London, Egypt Exploration Society.
- Firth, C. M. 1915 *The Archaeological Survey of Nubia, Report for 1909-1910*. Cairo, Government Press.
- Firth, C. M. 1927 *The Archaeological Survey of Nubia, Report for 1910-1911*. Cairo, Government Press.
- Fuscaldo, P. 1994 Some More on Aksha. *Revista de Estudios de Egiptología* 5: 9-24.
- Gauthier, H. 1912 *Le Temple de Ouadi Es-Seboua*. 2 vols. Cairo, Institut Français d'Archéologie Orientale.
- Gerharz, R. 1994 *Jebel Moya*. Berlin, Akademie Verlag.
- Geus, F. 1991 Burial Customs in the Upper Main Nile: An Overview. In W. V. Davies (ed.), *Egypt and Africa: Nubia from Prehistory to Islam*, 57-73. London, British Museum Press.
- Godlewski, W. and A. Lajtar 2008 *Between the Cataracts I*. Warsaw, Warsaw University Press.
- Griffith, F. LI. 1921 Oxford Excavations in Nubia. *Liverpool Annals of Archaeology and Anthropology* 8: 65-104.
- Griffith, F. LI. 1922 Oxford Excavations in Nubia. *Liverpool Annals of Archaeology and Anthropology* 9: 67-124.
- Griffith, F. LI. 1923 Oxford Excavations in Nubia. *Liverpool Annals of Archaeology and Anthropology* 10: 73-171.
- Griffith, F. LI. 1926 Oxford Excavations in Nubia. *Liverpool Annals of Archaeology and Anthropology* 13: 17-37.
- Grzymski, K. 1987 *Archaeological Reconnaissance in Upper Nubia*. Ontario, Benben Publications.
- Grzymski, K. 2005 Meroe, the Capital of Kush: Old Problems and New Discoveries. *Sudan & Nubia* 9: 47-58.
- Hawass, Z. A. 2006 *The Royal Tombs of Egypt: The Art of Thebes Revealed*. London, Thames & Hudson.
- Hintze, F. 1973 Meroitic Chronology: Problems and Prospects. In F. Hintze (ed.), *Sudan in Antiquity*, 127-145. Berlin, Akademie Verlag.
- Hintze, F. 1978 The Meroitic Period. In S. Wenig (ed.), *Africa in Antiquity. The Arts of Ancient Nubia and the Sudan I: The Essays*, 89-105. New York, Brooklyn Museum.
- Holthoer, R. 1977 *New Kingdom Pharaonic Sites: The Pottery*. Uppsala, Lund.
- Horton, M. 1991 Africa in Egypt: New Evidence from Qasr Ibrim. In W. V. Davies (ed.), *Egypt and Africa: Nubia from Prehistory to Islam*, 264-277. London, British Museum Press.
- Jacquet-Gordon, H. 1999 Excavations at Tabo, Northern Province, Sudan. In D. A. Welsby (ed.), *Recent Research in Kushite History and Archaeology*, 257-264. London, British Museum Press.
- Janot, F., C. Berger, F. Carter, J. Martin and A. Labrousse 1997 Observations sur la Phase d'Activité Napatéenne de la Nécropole de Sedeinga. *Cahiers de Recherches de l'Institut de Papyrologie et d'Égyptologie de Lille* 17-2: 129-135.
- Kemp, B. J. 1978 Imperialism and Empire in New Kingdom Egypt (c.1575-1087BC). In P. D. A. Garnsey and C. R. Whittaker (eds.), *Imperialism in the Ancient World*, 7-57. Cambridge, Cambridge University Press.
- Kendall, T. 1999 The Origin of the Napatan State: El Kurru and the Evidence for the Royal Ancestors. In S. Wenig (ed.), *Studien zum*

- antiken Sudan*, 3-117. Wiesbaden, Harrassowitz Verlag.
- Kendall, T. 2004 Jebel Barkal. In D. A. Welsby and J. R. Anderson (eds.), *Sudan: Ancient Treasures*, 158-164. London, British Museum Press.
- Kendall, T. 2008 Why Did Taharqa Build His Tomb at Nuri? In W. Godlewski and A. Łajtar (eds.), *Between the Cataracts I*, 117-147. Warsaw, Warsaw University Press.
- Leclant, J. 1984 Sedeinga. In W. Helck, E. Otto and W. Westendorf (eds.), *Lexikon der Ägyptologie V*: 780-782. Wiesbaden, Otto Harrassowitz.
- Leclant, J. and G. Clerc 1989 Fouilles et Travaux en Egypte et au Soudan, 1987-1988. *Orientalia* 58: 335-427.
- Lohwasser, A. in press News from the Cemetery of Sanam. *Proceedings of the 11th International Conference of Nubian Studies*. Warsaw.
- Macadam, M. F. L. 1955 *The Temples of Kawa II: History and Archaeology of the Site*. London, Oxford University Press.
- Mallinson, M. D. S., L. M. V. Smith, S. Ikram, C. L. Quesne and P. Sheehan 1996 *Road Archaeology in the Middle Nile*. London, Sudan Archaeological Research Society.
- Minault-Gout, A. 1997 La Nécropole Pharaonique de Saï. *Cahiers de Recherches de l'Institut de Papyrologie et d'Égyptologie de Lille* 17-2: 99-104.
- Morkot, R. 1987 Studies in New Kingdom Nubia, 1. Politics, Economics and Ideology: Egyptian Imperialism in Nubia. *Wepwawet* 3: 29-49.
- Morkot, R. 1988 The Excavations at Sesebi (Sudla) 1936-1938. *Beiträge zur Sudanforschung* 3: 159-164.
- Morkot, R. 2000 *The Black Pharaohs: Egypt's Nubian Rulers*. London, Rubicon Press.
- Morkot, R. 2001 Egypt and Nubia. In S. E. Alcock, T. N. D. Altroy, K. D. Morrison and C. M. Sinopoli (eds.), *Empires: Perspectives from Archaeology and History*, 227-251. Cambridge, Cambridge University Press.
- O Connor, D. 1993 *Ancient Nubia: Egypt's Rival in Africa*. Philadelphia, University Museum.
- Paner, H. 2005 Introduction. *Gdańsk Archaeological Museum African Reports* 4: v.
- Paner, H. and Z. Borowski 2007 Dome Graves and Other Uncommon Constructions from the Fourth Cataract Region. In C. N. Ser and M. Lange (eds.), *Proceedings of the Second International Conference on the Archaeology of the Fourth Nile Cataract*, 1-10. Wiesbaden, Harrassowitz Verlag.
- Priese, K. H. 1978 The Napatan Period. In S. Wenig (ed.), *Africa in Antiquity. The Arts of Ancient Nubia and the Sudan I: The Essays*, 75-88. New York, Brooklyn Museum.
- Randall-MacIver, D. and C. L. Woolley 1911 *Buhen*. 2 vols. Philadelphia, University of Pennsylvania.
- Redford, D. B. 2004 *From Slave to Pharaoh: The Black Experience of Ancient Egypt*. Baltimore, Johns Hopkins University Press.
- Reisner, G. A. 1910 *The Archaeological Survey of Nubia, Report for 1907-1908*. 2 vols. Cairo, National Printing Department.
- Reisner, G. A. 1919 Discovery of the Tombs of the Egyptian XXVth Dynasty at El Kurruw in Dongola Province. *Sudan Notes and Records* 2: 237-254.
- Reisner, G. A. 1923 *Excavations at Kerma I*. Cambridge, Mass, Harvard University Press.
- Reisner, G. A. 1931 Inscribed Monuments from Gebel Barkal. *Zeitschrift für Ägyptische Sprache und Altertumskunde* 66: 76-100.
- Reisner, G. A. and M. B. Reisner 1933 Inscribed Monuments from Gebel Barkal. *Zeitschrift für Ägyptische Sprache und Altertumskunde* 69: 24-39.
- Reisner, M. B. 1934 Inscribed Monuments from Gebel Barkal. *Zeitschrift für Ägyptische Sprache und Altertumskunde* 70: 35-46.
- Roeder, G. 1912 *Debod bis Bab Kalabsche*. 3 vols. Cairo, Institut Fran is d'Archéologie Orientale.
- Rose, P. 2008 Early Settlement at Qasr Ibrim. In W. Godlewski and A. Łajtar (eds.), *Between the Cataracts I*, 195-209. Warsaw, Warsaw University Press.
- Säve-Söderbergh, T. 1981 *Late Nubian Cemeteries*. Solna, Esselte Studium.
- Säve-Söderbergh, T. 1991 Teh-Khet: The Cultural and Sociopolitical Structure of a Nubian Princedom in Tuthmoside Times. In W. V. Davies (ed.), *Egypt and Africa: Nubia from Prehistory to Islam*, 49-53. London, British Museum Press.
- Säve-Söderbergh, T. and L. Troy 1991 *New Kingdom Pharaonic Sites: The Finds and the Sites*. 2 vols. Uppsala, Almqvist and Wiksell.
- Schiff-Giorgini, M. S. 1971 *Soleb II: Les Nécropoles*. Firenze, Sansoni.
- Schiff-Giorgini, M. S. 2002 Edification du Temple. In *Soleb III: Le Temple (Description)*, 23-33. Cairo, Institut Fran is d'Archéologie Orientale.
- Simpson, W. K. 1963 *Heka-nefer and the Dynastic Material from Toshka and Arminna*. New Haven - Philadelphia, University Museum of University of Pennsylvania.
- Smith, S. T. 1995 *Askut in Nubia: The Economics and Ideology of Egyptian Imperialism in the Second Millennium B.C.* London - New York, Kegan Paul International.
- Smith, S. T. 1997 State and Empire in the Middle and New Kingdoms. In J. Lustig (ed.), *Anthropology and Egyptology: A Development Dialogue*, 66-89. Sheffield, Sheffield Academic Press.
- Smith, S. T. 2003a Pharaohs, Feasts, and Foreigners: Cooking, Foodways, and Agency on Ancient Egypt's Southern Frontier. In T. L. Bray (ed.), *The Archaeology and Politics of Food and Feasting in Early States and Empires*, 39-64. New York, Kluwer Academic Publishers.
- Smith, S. T. 2003b *Wretched Kush*. London, Routledge.
- Smith, S. T. 2008 Tombos and the Transition from the New Kingdom to the Napatan Period in Upper Nubia. In W. Godlewski and A. Łajtar (eds.), *Between the Cataracts I*, 95-115. Warsaw, Warsaw University Press.
- Spencer, P. 1997 *Amara West I: The Architectural Report*. London, Egypt Exploration Society.
- Steindorff, G. 1935 *Aniba I*. Glückstadt - Hamburg, J. J. Augustin.
- Steindorff, G. 1937 *Aniba II*. 2 vols. Glückstadt - Hamburg, J. J. Augustin.
- Taylor, J. 1998 Nodjmet, Payankh and Herihor: the End of the New Kingdom Reconsidered. In C. J. Eyre (ed.), *Proceedings of the Seventh International Congress of Egyptologists*, 1143-1155. Leuven, Peeters.
- Török, L. 1995a The Emergence of the Kingdom of Kush and her Myth of the State in the First Millennium BC. *Cahiers de Recherches de l'Institut de Papyrologie et d'Égyptologie de Lille* 17-2: 203-228.
- Török, L. 1995b *The Birth of an Ancient African Kingdom: Kush and her Myth of the State in the First Millennium BC*. Lille, Université Charles-de-Gaulle - Lille III.
- Török, L. 1997 *Meroe City: An Ancient African Capital*. 2 vols. London, Egypt Exploration Society.
- Török, L. 2008 From Chiefdom to Segmentary State, Meroitic Studies: A Personal View. In W. Godlewski and A. Łajtar (eds.), *Between the Cataracts I*, 149-178. Warsaw, Warsaw University Press.
- Trigger, B. G. 1965 *History and Settlement in Lower Nubia*. New Haven, Yale University Publication.
- Trigger, B. G. 1976 *Nubia under the Pharaohs*. London, Thames & Hudson.
- Vercoutter, J. 1975 *Mirgissa II: Les Nécropoles*. Paris, Direction Générale

- des Relations Culturelles, Scientifiques et Techniques.
- Vercoutter, J. 1985 Préface: L Archéologie de l Ile de Saï. In B. Gratien, *Saï I: La Nécropole Kerma*, 7-17. Paris, Le Centre National de la Recherche Scientifique.
- Vercoutter, J. and W. Y. Adams 1959 *Why Excavate in Sudanese Nubia?* Gloucester, John Bellows Ltd.
- Vila, A. 1975-9 *La Prospection Archéologique de la Vallée du Nil, au Sud de la Cataracte de Dal. 1-11*. Paris, Le Centre National de la Recherche Scientifique.
- Vincentelli, I. 1997 Two Field Seasons in the Napata Region. *Kush* 17: 162-185.
- Vincentelli, I. 2006 *Hillat el-Arab: the Joint Sudanese-Italian Expedition in the Napatan Region, Sudan*. London, Sudan Archaeological Research Society.
- Weigall, A. E. P. 1907 *A Report on the Antiquities of Lower Nubia*. Oxford, Oxford University Press.
- Welsby, D. A. 1996 *The Kingdom of Kush: The Napatan and Meroitic Empires*. London, British Museum Press.
- Welsby, D. A. 1998 Survey and Excavations at Kawa, the 1997/8 Season. *Sudan & Nubia* 2: 15-20.
- Welsby, D. A. 2001 *Life on the Desert Edge*. 2 vols. London, Sudan Archaeological Research Society.
- Welsby, D. A. 2002 The Kushite Town and Cemetery at Kawa, the 2001-2002 Season. *Sudan & Nubia* 6: 32-37.
- Welsby, D. A. 2003 *Survey above the Fourth Nile Cataract*. London, Sudan Archaeological Research Society.
- Welsby, D. A. and J. R. Anderson 2004 *Sudan: Ancient Treasures*. London, British Museum Press.
- Wenig, S. 1999 *Studien zum antiken Sudan*. Wiesbaden, Harrassowitz Verlag.
- Williams, B. B. 1990 *Twenty-fifth Dynasty and Napatan Remains at Qustul: Cemeteries W and V*. Chicago, Oriental Institute of the University of Chicago.
- Williams, B. B. 1992 *New Kingdom Remains from Cemeteries R, V, S, and W at Qustul and Cemetery K at Adindan*. Chicago, Oriental Institute of the University of Chicago.
- Williams, B. B. 1993 *Excavations at Serra East*. Chicago, Oriental Institute of the University of Chicago.
- Żurawski, B. 2003 *Southern Dongola Reach Survey I: Survey and Excavations between Old Dongola and Ez-Zuma*. Varsovie, Editions Neriton.

坂本 翼

早稲田大学大学院文学研究科修士課程

Tsubasa SAKAMOTO

Waseda University